

図書館だより 12月号

令和6年12月11日発行 川島中学校・高等学校図書館

クラス読書会感想文特集！

11月28日に実施したクラス読書会の感想文を紹介します。読書会で使用したテキストは、一部分のみの抜粋なので、全文読んでみたい人は、図書館に来てくださいね。

☆ ムーンライト・シャドウ 吉本ばなな／著

事故で恋人を同時に失ったさつきと柊。不思議な女性うららの導きで、亡くなった恋人と再会し、これからの未来へと歩み出す、喪失と再生の物語。

恋人を同時に失った二人の気のまぎらわせ方がとても辛かった。二人のまぎらわせ方が違って、どちらにも共感できた。もし、私がさつきの立場なら同じ気のまぎらわせ方をしたと思う。でも、結果として残るのはただ辛い気持ちだけだと思った。等が死んだという事実は決して変わらない。現実と向き合って、乗り越えていくということが大切だと思った。

心に響いた(残った)一文 気をまぎらわせて時間をかせいでいるのだ。 62HR 女子

一番心に残ったのは、月や川、風、空などが何度も出てきて、これらがさつきの心情を写し出していると思ったことだ。等との思い出が深く心に残っていて、さつきが過去と向き合い、どう成長して乗り越えていくかがリアルに深く描かれていると感じた。 62HR 男子

☆ セメント樽の中の手紙 葉山嘉樹／著

ダム建設現場で働く男がセメント樽の中から見つけたのは、セメント会社で働いているという女工からの手紙だった。そこに書かれていたことは…。

1回読んだだけでは理解できず、2回目、3回目ですと理解できた。残された彼女の気持ちになるとすごく心が痛い。もし、自分の恋人がセメントに埋められて粉々になって帰ってこなくなったら悲しい。「赤い細かい石になって、ベルトの上へ落ちました」という一文は、読者にわかるように遠回しに伝えているのがすごいと思う。言葉の表現の仕方に驚いた。

心に響いた(残った)一文 石の下へ私の恋人は沈んでいきました。 52HR 女子



冬季休業中図書館開館日

12月24日～26日、1月7日

12月16日以降に借りた本の返却日は、1月8日です。
一人何冊でも借りられます！

☆ いのちの優しさ 高史明／著

自分の過去や出会った人の話、息子の自殺…。「生きることの意味」について考える。歎異抄を通して、いのちの尊さとは何かを高校生に語った講演会の記録。

僕は、知恵という目に見えないものに対して認識が変わったように感じる。知恵の先に価値があるのだと、これまでの僕は考えていた。考えることで価値を見出す。例えば、この生き物はどんなことができるのかな、どんな見た目かなというように。しかし、価値の先に知恵があるのだ。命があって、その上に知恵がある。「生きている」その事実こそが価値なのだ。

僕はそれをこの本から学んだ。知恵をもつことが価値ならば、人間以外の生き物は劣っているのか。僕はそうは思わない。それは人間にも同じことで、自分に個性はあるのか、何ができるのか、そう心へ問いかけてばかりいては「いのち」が見えなくなる。今、生きているこの体を、自分を大切にしたいと思う。しかし、個性や知恵に価値がないわけではない。「いのち」に加えてそれらも必要で、価値に捕らわれることなく、目的に向かい生きたい。

心に響いた(残った)一文 人間を超えた精神の中に真実があるのではないかと、その精神を見る目を持たないでいたのでは、当然、いのちという物差しが見えません。 61HR 男子

小学1年生の頃に見た夢のことを思い出した。その夢の中で、私は、自分の人生をかけてやらなければいけないこと、やるべきことを教えてもらい、でも起きたら全て忘れてしまって、落胆して朝から泣いたことがあった。

この本では、高さんは「生きることの意味」について、いのちの一部であることに価値を見出していた。私は、その当時見た夢が、本当に自分の人生でやるべきこと、生きる意味なんじゃないかと思っているところがある。この本を読んで夢のことを思い出したとき、夢の内容を忘れてしまったのは結果的に良かったのかもしれないと思った。漠然と自分にはゴールがあるということを知って、人生をかけてゆっくり探すというのが、生きる意味を知らないからこそできる生き方じゃないのかと思う。人によって受け入れられる考え方は違うと思うから、それぞれが納得のいく生き方を見つけるのが良いと思った。

心に響いた(残った)一文 人生は四季のあるしょく物だ。 61HR 女子

☆ 女子高生は董色 千田夏光／著

航空管制官を夢見る普通の女子高生K子と著者の文通交友録。進路選択に悩む女子高生を著者は「若い友人」として受けとめ、心を込めて返事をしたためる。

今の女子高生ではほとんどない、手紙でのやりとりが描かれていて、時代の違いを感じた。手紙の内容が難しく、勉強を頑張る上でのクラスに入ろうとしている女子高生の熱意が伝わってきた。難しい言葉や表現が多く、内容がわかりづらかった。

心に響いた(残った)一文 結婚までの「腰かけ」でOLをやっている若い女性の大半もきまって“おつとめ”であり“おしごと”である。 63HR 女子

☆ パニック 関高健／著

ネズミの大群に翻弄される人間の愚かで滑稽なさま、保身に走る役人の無能さを風刺している作品。

ネズミはとてもかわいそうな動物だと思った。害があるという理由で野生で過ごしているネズミがイタチやヘビなどを使って殺されるからだ。「禁猟の指令を流すのさ」という課長に、賛成の意志を示さずにいた俊介は、ネズミを殺すことに抵抗があるということがわかる一文がたくさん書かれていた。人間と動物の共存の大切さがわかる本だった。 54HR 男子

心に響いた(残った)一文 あれはネズミとみれば片っぱしから殺してしまえますからね。



☆ 芋粥 ^{いもがゆ} 芥川龍之介／著

周囲の人たちから馬鹿にされ、情けない日常を送っている主人公の五位には、一生に一度でいいから芋粥を思う存分食べたいという夢があった。

どれだけ他人からいじめられたり軽蔑されたりしても、全く動じず、ただ一つの「芋粥を飽きるほど食べる」という欲に誠実なところに関心した。ある年の正月、求めていた「飽きるほど」の芋粥を眼前にして、ためらって自分の夢を守っていた某に、僕は、いざ夢が現実しそうになると、実現したくてもしたくなくなるものだと思った。自分が今掲げている夢を完遂してしまえば、生きる理由がなくなってしまうと感じるからだ。この本を読んで、自分の夢は実現するために何度も遠回りをして、ゆっくりと叶えていくものだと思った。

心に響いた(残った)一文 いけぬのう、お身たちは。 53HR 男子

☆ 走れメロス 太宰治／著

親友を人質に差し出したメロスだが、自分が処刑されることになることと承知の上で友情を守り、人の心信じられない王に信頼することの尊さを悟らせる物語。

「疑うのが正当な心がまえ。」「人間のことを信じては、ならない。」王は、そう思っていた。私も人を信じるのは難しいと思うときがある。それはきっと、裏切られるのがこわいからだ。人を信じるには、その人の内面を知らなければならない。メロスとセリヌンティウスのように長い時間をかけて少しずつ信じていく。信じるのは難しいことだけれど、裏切るのは簡単にできてしまうのだから、王は人を信じられなかったのだと考える。

シラクスに戻る間、メロスにはたくさんの試練がおそいかかる。自分がメロスだったら、立ち上がることはできなかったかもしれない。疲れ切っているうえに、王に殺されるために走っているのだから。しかし、あきらめなかったメロスこそ私たちが見習うべき人物像だと思う。

心に響いた(残った)一文 信実とは、^{くうきよ}けっして空虚な妄想ではなかった。 51HR 女子

互いに信じ合っているからこそできることで、二人の間には言葉にできないほどの何かがあるのだろうと思った。自分だったら、本当に信じてくれているのだろうかなどの疑いをかけてしまうのに、メロスにはそれがなかった。人に信じられる人は、人を心の底から信じていることを知った。最後、悪魔のような王が、仲間にしてくれないかと頼んだのは、すべてに疑いの目を向けていた王の目の前に、疑いの目を向けない二人がやってきて、互いに一瞬疑ったことを深く反省していたからだと思う。言葉だけでなく行動で示すこと、人を疑わないことを学ぶことができた。

51HR 女子

心に響いた(残った)一文 セリヌンティウスは無言でうなずき、メロスをひしと抱きしめた。



☆ 鼻 芥川龍之介／著

僧の禅智内供は、鼻が長かったため、周囲から笑われていた。治療して鼻は短くなるが、人々は一層嘲笑する。ある朝、気がつくと、また鼻は長くなっており、内供は安堵したのだった。

「人間の心には、たがいに矛盾した二つの感情がある」という一文にとっても納得した。中童子や弟子の僧は、鼻が短くなったとたんにクスクスと笑い同情の感情がなくなっているように思った。他人の不幸に同情しない者はいないが、その人が不幸を切り抜けるとなんとなく物足りないような気がする。本文にあり、禅智内供が切り抜けられたのが面白くなく、陰口を言った。私も少なからず相手への悪口が頭に浮かんでしまうことがあるが、それを口や態度、表情に出さない、自分の心の中だけでとどめて、思わないように努力したい。

心に響いた(残った)一文 人間の心にはたがいに矛盾した二つの感情がある。 41HR 女子

どのようなコンプレックスがあっても、見方を変えればその人の長所になりうると感じた。内供は、自分の長すぎる鼻を周りには気にしていないと言いながら、弟子の僧に、鼻を短く治すよう自分を説得してほしいと思っている。このような内供の、僧としての自分と、人としての自分の心理描写がすごく丁寧で面白いと思った。

鼻が短くなり明るい気持ちとは反対に、周りの反応は冷たく、くすくすと笑われ、陰口を言われ、思っていたものとは違っていた。そして、鼻を短くしたことをかえって恨めしく思うようになった。ここからも、人としての自分を優先した、僧としての自分の弱さが見えて、とてもおもしろかった。

心に響いた(残った)一文 人間の心にはたがいに矛盾した二つの感情がある。 41HR 男子

☆ 伊豆の踊子 川端康成／著

伊豆へ一人旅に出た青年が、下田に向かう旅芸人一座と道連れとなり、踊子の少女に淡い恋心を抱くが、悲しい別れとなる物語。

久しぶりに本を読み、文章が難しすぎて言葉の意味がわからないところがあったけれど、旅先で主人公の「わたし」が様々なことを経験したことはよくわかった。普段、昔の本を読む機会はなかなかなく、いざ読んでみると何を言っているのかわからないということが起きてしまうことに気づいた。ずっと読んでいないと、読み方もわからず理解もできないので、学校の図書館や地域の図書館などで借りて読んでみようと思った。

心に響いた(残った)一文 頭が澄んだ水になってしまっていて、それがぼろぼろ^{こぼ}零れ、その後には何も残らないような甘い^{こぼ}快さだった。 43HR 女子

☆ オツベルと象 宮沢賢治／著

地主のオツベルのところに白い象がやってくる。オツベルは象をうまく^{だま}騙して^{かこく}過酷な労働を課し、象はだんだんと弱っていくが、ある日仲間たちが助けに来て…。

象が月と話しているとき、赤い着物の童子が立って^{すずり}硯と紙を捧げていたという一文は、深い意味がありそうだった。もしかしたら、象はもう死んでしまっているのかなと思った。最後の、象が「さびしく笑った」という表現も、もう死んでしまっているのかなと、いろいろ考えさせる物語だった。

心に響いた(残った)一文 オツベルときたら大したもんさ。 42HR 女子

☆ 赤毛連盟 A. C. ドイル／著

ホームズは燃えるような赤毛の初老の男性、ジェイベズ・ウィルスンから相談を受けていた。とても奇妙な体験をしたというウィルスンから詳しい事情を聞く。

不思議だったのは、赤色の髪にこだわっているところだった。髪色で人を判断しているところがあったので、それはなぜかと思った。普段、自分からこういう本を読もうと思ったことがなかったので、今回読んでみて、理解するのが難しかった。

心に響いた(残った)一文 人間は無 44HR 女子

